

# 典礼刷新とローマ典礼

1962年10月11日から始まり、1965年12月8日に閉会した第二バチカン公会議で、最初に承認された二つの文書の内の一つが、典礼憲章です。これは第二会期を終える総会で、1963年12月4日に承認されました。これを公布するに当たっての教皇パウロ六世の言葉は、次のようになっていました。

この憲章の中で布告されたこれらすべてのこと、その個々のことは、諸教父の賛同したことである。わたしもキリストからわたしに授けられた使徒的権能をもって、尊敬に値する諸教父と共にこの憲章を聖霊において承認し、制定し、このように教会会議によって制定されたことが神の栄光のために公布されるよう命じる。

この典礼憲章に基づいて1969年に公布されたラテン語規範版のミサ典礼書が、日本語に正式に翻訳されて全国で使われるようになったのは、1970年から1971年にかけてであったとされています。1978年になって、ようやく本格的なローマ・ミサ典礼書の国語訳(祭壇用)が刊行され、その巻頭に「総則」が掲載されましたが、それまでに使徒座の認証を受けた数々の「日本の教会における適応」が、総則本文の該当箇所に挿入されました。2012年現在これらは現行のまま有効であり、日本カトリック司教協議会は、我が国の教会のミサが“この指示に従って行われること”と定めています。\*

## 1. ローマ・ミサ典礼書の総則

「ローマ・ミサ典礼書の総則」と「典礼暦年に関する一般原則」の二文書だけをまとめた別冊が、一般向けに初めて出版されたのは1980年のことでした。その序文で、当時の典礼委員長であった長江恵司教は次のように述べておられます。

題名だけを見ると、無味乾燥な法規や条文の集録のような感じがしますが、実際に取り扱われている題材や、その取り上げ方は、従来の典礼書の注記にあり勝ちな儀式についての法的指示と全くちがって、それぞれの祭式の意味、構造はもとより、典礼の場所、祭器、典礼期節に至るまで、およそ感謝の祭儀に関わりのある重要なことがらすべてについて、広く深く神学と司牧の観点から説明が展開されています。このように懇切明快で権威のある解説書が一般に普及すれば、ミサについての理解がますます深まり、ミサを生きる人々がますます多くなることが期待される次第です。

実際にはカトリック教会の司祭や信者たちの中でも、典礼憲章に書かれている次の文章のように、ミサを理解している人は未だ少数なのです。

「典礼は教会の活動が目指す頂点であり、同時に教会のあらゆる力が流れ出る泉である。」(10)

「母なる教会は、すべての信者が、典礼の挙行への、充実した、意識的な、行動的な参加へ導かれるよう切に希望している。このような参加は、典礼自身の本質から要求されるもので、キリストを信じる民は、……洗礼によってこれに対する権利と義務を持っている。」(14)

オリエンズ宗教研究所から発行されている「ともにささげるミサ [ミサ式次第 会衆用]」は、この「総則」のいわば要約書であり、実用的なガイドブックであると言えます。

---

\* 2000年3月に「ローマ・ミサ典礼書」のラテン語規範版第3版が公布されてその二年後に出版されたため、日本カトリック典礼委員会でも現行典礼書の改訂作業が進められてきました。しかし、その翻訳文や「日本の教会における適応」について、ローマの典礼秘跡省との協議は現在のところ合意の見込みがありません。日本カトリック中央協議会は、新しい規範版の理解と研究に資するために、2004年にとりあえず暫定版として新しい「ローマ・ミサ典礼書の総則」を出版しました。これは現在インターネットを通じて、Web文書館(<http://www.cbcj.catholic.jp/jpn/library/book/index.htm>)からPDFファイルでダウンロードすることができます。その5-6ページに、現行の「日本における適応」が掲載されています。

## 2. 「聖書と典礼」およびその手引き

オリエンズ宗教研究所から「聖書と典礼」が発行されるようになったのが、いつ頃からかだったのかを筆者は知りませんが、遅くとも 1979 年にはその手引きとして、「ことばとしるし誌」が月刊で発行されていました。そしてこれに、1986 年 12 月から約一年半にわたって土屋吉正神父が書かれた「典礼奉仕の役割と実践」という連載記事が、その後一冊の本になって、1989 年に「ミサがわかる」という題で出版されました。これは現在に至るもなお、日本におけるカトリック教会のミサの最も基本的なガイドブックとして、最も重視しなければならない書物です。\*

ですからこれは、小教区の司祭はもちろんのこと、何らかの形で典礼奉仕にかかわっている信者ならだれでも、是非学んでいただきたい基本的な事柄が「わかる」ようになるための手引き書です。実際のところ、私たちのミサは本来あるべき姿から、かなり多くの点で逸脱してしまっているのが現状です。どのような善意も熱心も、基本的な知識と理解が欠けていれば、それは正しい“神奉仕”にならないことを、私たちは肝に銘じなければなりません。そのようなわけで、典礼憲章 22(典礼の規制権) に述べられている以下の文章を、真面目に考えていただきたいと思います。

「聖なる典礼の規制は、教会の権威だけに依存している。この権威は使徒座にあり、また、法の規定によって司教にある。

……したがって、他の何人も、たとえ司祭であっても、自分の考えで、典礼に何かを加え、除去し、変更してはならない。」

## 3. 「ミサを祝う」の出版

土屋神父の書物が公にされてから 20 年後の 2009 年になって、同じオリエンズ宗教研究所から国井健宏神父による「ミサを祝う」が出版されました。これは月刊誌「福音宣教」に連載されていたもので、著者の上智大学での講義をもとにしたものとのことです。前半の 130 ページがミサの歴史解説に当てられ、後半の 110 ページほどで現代の我が国のミサを、いろいろと論じています。この本の趣旨を著者は序で、「ミサの理解を深めたいと思っておられる方々のお役に立てば幸いである」と書いておられます。

以上の二冊の解説本を中心に、現在の私たちのミサの問題点を具体的に指摘し、また考えてみたいと思います。筆者は正式なカトリックの信者ではありませんが、ミサを愛し、教会を愛することについてはだれにも引けを取らない一人の信者として、カトリック浜松教会の毎主日のミサに参加させていただいている者です。ですから、以下の記述をお読みくださる方々も、自分たちのミサを本当に愛する心で熱心に、筆者の数々の指摘を考えてみていただきたいと思います。

2012 年 桑 栄 一

---

\* 「ことばとしるし誌」は、1988 年 12 月の 121 号で閉刊になりました。

# 私たちの「ともにささげるミサ」

## 1. 集会の場の三つの中心

感謝の祭儀(ミサ)をささげるために、集会の中心となる第一の場が祭壇(主の食卓)であることは、カトリック信者ならだれでもよく知っています。ところが「総則」の原則によると、この祭壇は感謝の典礼に入るまでは使われないことになっているのです。

入祭の歌が歌われる中で、司祭は祭壇に到着するとこれに深く礼をし(日本における適応)、それから司祭席に行きます。この司祭席が集会の第二の中心であって、ミサの開祭と閉祭は司祭席で行われることになっています。実際には建物の構造が適当でないために、多くの教会で司祭の挨拶や祈願が祭壇で行われていますが、国井神父はこれを“かつてすべてが祭壇で行われた個人ミサの名残である”として、ミサの各部での中心がどこにあるかをはっきり現す場所の設定が大切であると主張しておられます。

集会の中心となる第三の場は朗読台(神のことばの食卓)であって、ことばの典礼の間はこの朗読台が祭儀の中心になります。「総則」はこれを、「動かすことの出来る簡単な書見台ではなく固定された朗読台であることが適当である」と述べています。

そして、感謝の典礼に入る供えものの準備のところで、祭儀の中心が朗読台から祭壇に移ります。

宣教奉仕者(聖書朗読者)や答唱詩編の唱者、また司祭や助祭が、聖書朗読台に向かう前に祭壇のところに行って表敬するのは、その席から朗読台に行くのにどうしても祭壇の前を横切らなければならないような場合のことで、土屋神父は、なるべくその必要がないように朗読者や唱者の席は朗読台側に設けるのがよいと述べ、それよりも朗読者は神のことばを教会に告知する任務を委ねられるのですから、「ことばの典礼の司会者であり、キリストの役割を務める司式司祭に最も近い地点で司祭の方を向いて一礼し、朗読の任務受託の意思を表明する」ようにと勤めておられます。

宣教奉仕者(朗読者)は聖書を読み終わると、「朗読者は聖書に一礼し、側らに立つ奉仕者が“神に感謝”と答える」(日本における適応)と、「総則」で定められています。朗読者が自分で“神のことば”と呼びかけ、会衆が“神に感謝”と答える方式は、我が国では使徒座の認証を受けていません。

司祭あるいは助祭が福音を朗読するときは、「日本では、福音書に十字架のしるしをしながら“〇〇による福音”と唱える。また、朗読が終わると司祭あるいは助祭は福音書をおしいだいて“キリストに賛美”と唱え、会衆は“キリストに賛美”と応唱する」と、「総則」で定められています(日本における適応)。親指で福音書と自分の額、口、胸に十字架のしるしをすることは、我が国では使徒座の認証を受けていません。

カトリック教会のミサが「ことばの典礼」と「感謝の典礼」という二つの部分から成り立っていることを理解し、祭壇(主の食卓)と共に朗読台(神のことばの食卓)をも表敬の対象として重んじることが、ミサをささげる上で大切です。

## 2. 対話句と初めのあいさつ

「入祭の歌が終わると、司祭と会衆は十字架のしるしをする。それから司祭は、集まった共同体に挨拶して、主の現存を示す。このあいさつと会衆の応答は、共に集まった教会の神秘を表す」と、「総則」には書かれています。

土屋神父はこれを解説して、“あいさつ”と言っても、“おはようございます”と言ったような詞ではなく、神に呼び集められて聖霊の交わりの内に一つになっている中心に、復活された主キリストが共にいてくださることを意識させる……、集まった会衆の祭司の民としての意識を高めることを第一に考えるべきだ……、と書いておられます。

「主は皆さんとともに」「また司祭とともに」というこの対話句は、このあと福音朗読の前に、感謝の典礼では叙唱前の対話句の初めに、交わりの儀では“主の平和がいつも”という詞を付けて、最後に閉祭に当たっては派遣の祝福の前に使われます。この会衆の応答は、司祭という“人”に向けてではなくて、“司祭されること”、つまり司祭行為を指しているのです。後ろにアクセントを付けて司祭と発音することが求められています。ですから典礼聖歌では d - f と曲付けされているのです。

「会衆のあいさつがすんでから、司祭あるいは他の奉仕者は、短いことばで、その日のミサを信者に説明することができる」と「総則」は定めています。

国井神父は、「司式者が共同体のミサのリーダーとして、集まった人々の間に温かな雰囲気をつくりだすためのものであり、しかもそれを“短いことばで”行わなければならない。ミサへの導入のことばであって、“もう一つの説教ではない””と書いておられます。使徒座の認証を受けていない暫定版の「総則」では、さらに強調して“非常に短いことばで”となっていることは、参考になると思います。

### 3. 感謝の典礼 - 供えものの準備

感謝の典礼に入ると、ここで共同体の集まりの中心は朗読台から主の食卓(祭壇)へと移ります。「感謝の典礼の初めに、キリストのからだと血になる供えものが祭壇に運ばれる。…… 献金または他のささげものも奉納される。…… 奉納の歌は、供えものが祭壇におかれるときまで続ける。」

国井神父の解説は、ユンクマンの「ミサ」に書かれている説明とほぼ同じ内容です。「第二バチカン公会議の“式次第”の改正では、奉納という表現は廃止され、その代わりに“供えものの準備”という名称を使っている。真実の奉献はキリストの唯一の犠牲だけで、そのほかに奉献や奉納が行われるのではない。式次第の流れから見ると、神のことばの食卓(朗読台)を祭儀の中心とする“ことばの典礼”から、次の“感謝の典礼”に移るために、まず主の晩餐の食卓(祭壇)の準備をするのであり、そのために必要なパンとぶどう酒と水が用意されるのであって、ここではまだ、捧げられるのではないことが明記されている。」

ユンクマンは、新しいミサ典書作成の討議における主張を紹介しています。「ミサの本質的な出来事は、まさに今これから始まるのであって、延々と行われる奉納の儀によって曖昧にされてはならない。とりわけ、教会の奉献でもある“奉献”は、それは、聖別においてこそ行われるのだと心得、それとは別の儀式でうむやみにされてはならないのである。…… 新しいミサの式次第では、中道が選ばれている……。」

### 4. 奉献文

「ここで祭儀全体の中心であり頂点である感謝の祈り(奉献文)、すなわち感謝と聖別の祈りが始まる」と「総則」が述べている通り、感謝の祈りを通して司祭と会衆は一つになって、いけにえを奉献します。この祈りの大部分は司祭が司式者として一人で唱える(あるいは歌う)けれども、この祈りの主語はいつも“わたしたち”、つまり共同体全体なのです。

「ともにささげるミサ」では、上段に第二奉献文、下段に第三奉献文が掲載されています。記念唱のすぐ後に続く部分は「記念」(アナムネーシス)と“奉献”で、第二奉献文では「わたしたちはいま、主イエスの死と復活の記念を行い、ここであなたに奉仕できることを感謝し、いのちのパンと救いの杯をささげます」、第三奉献文では「わたしたちはいま、御子キリストの救いをもたらず受難・復活・昇天を記念し、その再臨を待ち望み、いのちに満ちたこのとうといいけにえを感謝してささげます」となっています。国井神父はこれを解説して、「ミサがキリストのいけにえを再現するものであることを、この部分が最も強烈に語っており、祈り全体が“奉献文”と呼ばれるゆえんである。そして奉献文のこの中心部の大切さがそこなわれないように、感謝の典礼の最初の部分の“奉納”ということばが廃止され“供えものの準備”に変えられた」と言っておられます。

典礼刷新の中で特筆すべきことは、1500年のローマ典文の伝統を破って新しい奉献文が作られたことです。そのうち第二奉献文は「ローマのヒッポリトスが215年ごろ書き記したテキストに手を加えたもの」、第三奉献文は「ローマ典礼の伝統と再発見された奉献文の理想像を非常に良くまとめたもの」と、ユンクマンが説明しています。さらにユンクマンが第二奉献文を「共同体全体の典礼のためというより、もっとあっさりした形」と言っている通り、「総則」はこれを「週日または特殊な事情において用いるのが適当である」と述べています。そして、「第三奉献文は、…… 主日と祝日には優先的に用いられる」と、選択の基準を定めています。

私たちの教会で、主日のミサに第三奉献文がほとんど全く使われていないことは、決して健全なことではないのです。三種類ある信仰宣言の選択と共に、奉献文の選択が、安易に“短時間で済ませることが出来る”ことを基準にしてしまっているのではないか、反省する必要があるようです。

## 5. その他

### 動作と姿勢について

「総則」は「すべての参加者が共通の姿勢を守ることは、集会の共同体性と一致のしるしである」と述べて、会衆の動作と姿勢について次のように定めています。「すべてのミサにおいて、入祭の歌の始まりから、あるいは司祭の入堂から集会祈願の終わりまで、福音の前のアレルヤ唱のとき、福音の朗読のとき、信仰宣言と共同祈願の間、そして、奉納祈願からミサの終わりまででは立っているものとする。ただし、以下に述べる部分は除く。座るのは、福音の前の聖書朗読および答唱詩編の間、説教の間、奉納の供えものの準備のときである。また、適当であれば、拝領後の聖なる沈黙の間にも座る。」

### 拝領の歌について

司祭の「神の小羊の食卓に招かれた者は幸い」という呼びかけに答えて、会衆が(司祭と一緒に)拝領前の信仰告白を唱えるのは、「会衆の拝領と司祭の拝領の分離を避けるため」と、ユンクマンが解説していますが、「総則」は拝領の歌に関して同様の説明をしています。「司祭と信者が秘跡を拝領している間に、拝領の歌が歌われる。それは、拝領者の霊的一致を声の一致で表現し、心の喜びを示し、キリストのからだを受けに行く行列を、より兄弟的なものにするためである。歌は、司祭が拝領するときに始められ、……」 これを実現するためには、オルガニストと聖歌隊が交互に分担して、一方が拝領に行くときには他方が歌(あるいは奏楽)を受け持って、拝領の歌(あるいは奏楽)が中断しないようにしなければなりません。

### 拝領の仕方について

この件に関して、国井神父がその著書で明快に述べておられますので、それを紹介します。「聖体は手で受けるか、口で受けるかは、拝領する人の自由に委ねられている。三世紀初めにヒッポリトスは“右手を左手の上に重ねて …”と書いて、215年頃のローマの教会では右手の上にパンが置かれたことを伝えている。日本では伝統的な作法に従い、左手を上にして聖体を受け、右手で取り上げ、左手をそえながら口に持っていくという、丁寧な方法が勧められている。」これは“日本における適応”として、1970年に使徒座の認証によって許可されました。

### 閉祭について

「感謝の祭儀を終わります。行きましょう、主の平和のうちに。」「神に感謝。」これでミサは完全に終わっています。「総則」では、その後の信者の退堂に関して何も言われていません。あまりにも簡単すぎるので、国井神父は“会衆がその日にふさわしい歌を歌いながら退堂する”という例をあげて、もう少し丁寧な形にする工夫を期待しておられます。だからと言って、会衆全員が退堂しないで御聖堂で閉祭の歌を延々と歌っているのは、(ミサはすでに終わっているのですから)やや見当外れなことと言わざるを得ません。

—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*

私がこの資料を浜松教会の一部の友人たちにプリントして提供してから暫くして、「福音宣教誌 2012年8・9月合併号」に〈日本の典礼刷新〉特集が掲載されました。

- 典礼憲章五十年に憶う(佐久間彪)
- 典礼の国語化の中で(清水司)
- 主の死と復活を告げ知らせる(編集部)
- フォーラム 追悼・土屋吉正師 「聖書と典礼」での出会い(山本量太郎)
- 典礼とともに五十年(宮越俊光)

貴重な特集として、おおいに味わい、くりかえし読み返していただきたい証言の数々です。